

# 香川大学教育学部における台湾国立嘉義大学師範学院との 研究・学生交流報告および今後の展望

松本 博雄、櫻井 佳樹、高木 由美子、寺尾 徹、松井 剛太、松島 充、  
宮崎 英一、\*小川 千春、十川 憲人、筒井 美帆、三好 文乃、高谷 咲衣、  
多胡 千比呂、山口 華歩  
(香川大学教育学部、\*大学院教育学研究科)

Visit Reports and Future Perspectives for the Faculty Exchange between  
Teachers College, National Chiayi University and Faculty of Education,  
Kagawa University

Hiroo MATSUMOTO, Yoshiki SAKURAI, Yumiko TAKAGI, Toru TERAOKA,  
Gota MATSUI, Mitsuru MATSUSHIMA, Eiichi MIYAZAKI, \*Chiharu OGAWA,  
Kento SOGO, Miho TSUTSUI, Ayano MIYOSHI, Sae TAKAYA,  
Chihiro TAGO, and Kaho YAMAGUCHI

Kagawa University, Faculty of Education and \*Graduate School of Education  
Email: matsumoto.hiroo@kagawa-u.ac.jp

## はじめに (松本博雄)

2019年10月30-31日の日程で、本学と嘉義大学による第7回合同ワークショップが台湾国立嘉義大学にて開催され、教育学部・教育学研究科からは教員7名、大学院生1名、学部学生6名が参加した。学生を含む幅広い参加者で嘉義大学に訪問してのワークショップは、2016年11月開催の第5回に続いて2度目となる。本稿では、今回のワークショップに参加の機会を得た学生および教員にどのような気づきがあったかを、2016年の報告(松本・寺尾・高木・宮崎・バテン・池田・松嶋・高橋・山地・森山・野田・小川・瀧・松井, 2017)と比較しつつ検討したうえで、嘉義大学をはじめとする大学間連携が基盤となる、学部による国際交流の今後の展望をまとめる。

## 2019年ワークショップにおける研究・学生交流の概要 (松本博雄)

4日間の訪問日程のうち、ワークショップに充てられたのは上述の2日間であり、大学本部が置かれている蘭潭キャンパスにて開催された。うち、嘉義大学師範学院(Teachers College)との間での交流プログラムが開催されたのは30日午後と31日午前中である。30日午後は、Parallel Sessions for Educationとして分科会が開催された。2つに分かれた部屋のうち、Early Childhood and Primary Educationを主なテーマとする会では台湾側の発表が7本、日本側の発表が5本、E-Learning, STEM and International Educationを主なテーマとする会には台湾側発表4本、日本側発表8本が準備され、それぞれ16-20名程度の参加者があった。教育学部からは、それぞれの会で教員と大学院生が個

人研究発表を行うとともに、学生は幼児教育・教育学の専攻毎に分かれ、3人ずつのグループで日本の就学前および初等教育の概要を含む発表を行い、研究内容や学生生活を中心とする交流を深めた。

31日午前は、2つのグループに分かれ、公立幼稚園（嘉義市復國幼稚園）・小学校（嘉義市港坪國民小学校）を訪問した。教員3名、学生3名が参加した幼稚園訪問では、幼児教育学系長である鄭青青副教授と嘉義大学学生2名に案内いただき、幼稚園長も交えて見学しながら互いの研究関心や台湾・日本の保育実践について議論ができた有意義な時間となった。いっぽう小学校訪問は、教育学部教員4名、院生・学生4名に、教育学部以外のメンバーも加わった訪問団を、師範学院の国際交流担当である黃國鴻教授と学生2名に案内いただき、アメリカ英語と算数、アートの授業を中心に見学の機会をもつことができた。



分科会（Early Childhood and Primary Education）における学生発表



写真左：分科会（Early Childhood and Primary Education）参加者 右：幼稚園にて

## 学生の振り返りから

（小川千春・十川憲人・筒井美帆・三好文乃・高谷咲衣・多胡千比呂・山口華歩・松本博雄）

参加学生は訪問終了後、それぞれ実施報告書をまとめた。主に分科会に関する事、幼稚園・小学校訪問に関する事、その他全体的なことに分けて、松本ら（2017）の形式に準じて特徴的な内容を報告書より抜粋する。

### 【分科会】

- ・嘉義大学・香川大学合同シンポジウムに参加することにより、大きくわけて2つの成果を得ました。一つめは、両大学の交流の取り組みについて詳しく学んだことで、二つめに自分の研究発表を行う機会を得たことです。
- ・双方に相手方の言語を知らない状況で、英語に自信がなかったとしても共通語をもっていれば、実

りあるコミュニケーションが取れるものだと実感しました。

- ・自分が分かって話すというだけではなく相手に伝えるという難しさを感じ、英語でのコミュニケーション力への働きかけが日本の大学などでもっと大切になってくるのではないかと感じました。
- ・言葉で繋がらなくても、表情や雰囲気伝わることがあるということや、どんな国の方々も相手を受け入れようとする優しさを持ち合わせていると実感でき、国際交流は何も恐れるものではないと分かりました。伝えたいことが全部は伝わらなかつたり聞き取れなかつたりしましたが、積極的に話しかけたり質問したりしても、誰も嫌な顔をすることなく丁寧に対応してくださいました。相手の優しさはもちろんのこと、コミュニケーションにおいて大切なことは、言葉だけではないと分かりました。伝えたい、聞きたいという思いがあれば成り立つものだからこそ、どんなときも相手とコミュニケーションを図ることを諦めてはならないと思いました。
- ・台湾の学生や教授の発表から新しい知識を身につけたり、これまで勉強してきたことについて改めて考えたりすることができた。自分と同じ年代の学生が台湾ではどんなことを学んでいるかと興味を抱いていたが、実際に発表を聞いてその研究内容の有用性や技術の高さに驚くことばかりであった。参加者がそれぞれ異なる様々な分野を専門として研究・勉強しているため、教育に関する知識の幅が大幅に広がったようにも感じる。
- ・嘉義大学では、幼児教育コースの学生だけが幼児教育について研究するのではなく、ほかの学部の学生や先生方と共同開発を行っていたり、知識の共有を行っていることが伝わってきて新たな視点で幼児教育について考えることができました。
- ・嘉義大学の方のプレゼンテーションの中で最も印象に残っているのは、工学部の方の発表です。ロボットを作ってプログラミングで遊ぶものや、ゲームを開発している方などがいて、そうした作ったものを実際に子どもたちに実践してもらったことを発表してくれました。実際にゲームやロボットを作ること自体もすごいと思ったのですが、実際に作ったロボットを（保育）現場に出して研究するというように、工学部と教育学部がつながっていることがすごいと思いました。
- ・教育分野でプレゼンテーションをしたが、研究において日本の学生とは着目する視点が大きく異なっていた。特に印象に残ったのはこれから日本の小学校でも行われるプログラミング教育だ。教育という枠だけに縛られずにクリエイティブな提案ができるのも嘉義大学の学生の強みだと思い、学ぶことが多くあった。

### 【幼稚園・小学校訪問】

- ・日本以外の小学校の現場を実際に知ることで電子黒板がこんなに便利なものであり、児童の学びを深めるものであると実感した。時代が進み発展している中で日本の教育現場でまだ普通の黒板にこだわり続ける理由について考えさせられるきっかけともなった。
- ・教科書と対応している電子黒板は児童の学びを助けるものとなる。それだけでなくその電子黒板には英語の発音、文字などそれぞれに焦点をあてたゲームがたくさん収録されていた。児童がそれを積極的にやりたがる姿や楽しんで行っている姿を見ることができた。このように児童がやりたいと思える授業をツールを使って行うことこそがアクティブラーニングではないかと考えた。これは嘉義を訪問したからこそ得ることができた視点である。嘉義を訪れていなかったら、台湾の小学校を知っていなかったら日本の教育現場について考えさせられたりすることもなく、とても損をしていたように思う。
- ・特に台湾の公立学校に参観に行ったことが印象的であり、二つの気づきがあった。一つめは、授業

の教具についてである。私は、小学校6年生の算数の授業を見学した。円の面積を求める授業であった。そこで子ども達はとても便利な道具を用いて円の面積を学んでいた。簡単に説明すると、円をピザのように何等分かに切り分けられたシールを子ども達は持っていて、そのシールを別紙に貼ることで、円を長方形のように変形して面積を求めるというものだった。日本の学校でこのような授業をしようとする、教員が手作りで用意するしかない。……（中略）……普通の教員が準備するのは容易ではないだろう。……（中略）……二つめは、現地の学生との交流である。私は学校訪問中に、現地の学生の大学生とたくさん会話した。そこで一番印象に残っていることは、「日本の先生は、どうして忙しいの？」と聞かれたことだ。……（中略）……台湾の人が日本の教員の働き方など、海外の教員の在り方について知っていること、興味を持っていることに驚いた。以上の2点の気づきを通して、日本の教育を少し客観視できたことが、私にとってとても大きな成果であった。教育はいろんな形があって、自分が学んでいることは本当に一部でしかない……

- ・実際に訪問してみると日本の特徴だと感じていた廃材を用いた製作あそびなども行っており驚いたり、日本と同じように遊ぶ姿もあつたりでさまざまな発見がありました。このような経験は日本の保育や制度についてさらに理解したいという気持ちと、広い視野から幼児期での子どもの姿を見るきっかけとなったと感じています。

#### 【全体】

- ・大学間交流がこの先もあり続けるよう、促進する一員としてこのような機会に積極的に関わっていきたいと思います。
- ・一度、奨学金などによって後押しをしてもらって何かを経験し、きっかけを得る事で、その後自主的・積極的に様々な挑戦を試みようとするようになる、という変化も期待することができるのではないだろうか。
- ・これからは今回の学びや良さを伝えて、私みたいに国際交流のきっかけを待っている学生が一人でも、このような貴重な機会に参加できるように発信していきたいと思いました。

松本ら（2017）では参加学生のレポートから、①語学力の必要性、②日本と台湾の文化の違いについて、③幼児教育に関する養成段階の免許取得の違いについて、の3点が主に見いだされている。それと比較すると今回の学生による報告では、特に分科会に関して語学力に関する気づきはもちろんものの、上述の抜粋にも示されているように、コミュニケーションの枠組みそのものに関する振り返りが目につく点が興味深い。さらに特筆すべきは、それらの先にある研究内容、また研究や発表に取り組んでいる学生やそれを支える大学のシステムへの関心の広がりを読み取れることである。このことは、今回の幼稚園および小学校訪問の振り返りにおいて、学生が単に海外の文化を知識として習得するにとどまらず、見学に刺激された結果、自らの教育のありようについて新たな問いを立てつつある点と共通している。このことは、学生の国際交流を発展させようとする上で、ともすれば語学力に必要以上に焦点をあてがちである一般的な傾向に対し、新たな方向性を提起しうる可能性を示唆している。それは、学生自身の専門分野を軸として内容面の充実を図ることが、国際交流活動の成果に対する新たな評価軸となるということであろう。

今回、学生の感想に一步先の発展が見られたことは、松本ら（2017）で報告されているワークショップに比べ、今回の嘉義大学側の分科会発表者に大学院生が数多く含まれていたことも関連していると思われる。それに加え、特に幼児教育関連を中心に交流が深まりつつある結果、双方の担当者

が互いの学生の様子や大学の雰囲気についての理解が深まり、効果的な交流内容のアレンジができるようになりつつあることが挙げられるだろう。これらの成果を着実に継続し発展させていくためには、上述の学生報告にもあるように、国際交流にもともと積極的な学生だけではなく、「国際交流のきっかけを待っている学生」の裾野を広げ、教員も含めて語学面に偏らない国際交流活動の成果を伝えていくことが欠かせない。このような取り組みの具体化として、たとえば幼児教育コースでは2014年より、学生の海外留学や教員の在外研究等の機会があるごとに必ず、コース学生・教員を対象にする訪問報告会を実施している。今回は2019年11月20日の昼休みを利用して開催し、教育学部国際交流委員会および学務係担当者の協力を得て周知した結果、コースを越えた教育学部生や教員、その他国際交流関係者も合わせて50人程度の参加者があり盛況であった（下写真参照）。また上述の振り返りに加え、学生からは、訪問計画を早めに周知すること、学生への広報を効果的に行うこと、学生の主体的な姿勢を引き出す内容をアレンジすること、報告会を確実に実施することで実施学生と直接気軽に話せる体制をつくること等、今後の交流のきっかけを「次」に広げるための前向きな提起が寄せられている。一つ一つ、着実に実施していくための、学部内そして学部を越えた支援体制作りが望まれる。



嘉義大学訪問報告会（2019年11月20日）の様子

## 教員の振り返りから（寺尾徹・松島充）

続いて2名の教員の視点より、それぞれ活動の振り返りと今後の提案をまとめる。寺尾は前回の訪問時、国際交流委員長として中心となってアレンジを担当している。松島は初めての訪問である。

### 1) 分科会と小学校訪問に参加して（寺尾徹）

分科会で私は、E-learning and Applied Education（E-ラーニングと応用教育）のセッションに参加した。嘉義大学から4件、香川大学から教員7件、修士課程大学院生1件の合計12件の発表があった。嘉義大学からの発表は黄先生を除くと4名が修士課程の大学院生であり、院生と教員のバランスも良かった。本学からはApplied Educationや周縁に関する発表があり、嘉義大学からは、手法としてのE-learningとともに、その効果的な応用を全面的に追究した発表が多かった。分科会の表題にぴったりのセッションだったと思う。

学校教育におけるコンピュータプログラミング教育がやはり台湾でも課題となっている様子であり、いかに児童生徒に苦手意識を持たせずに学習できる条件を作るか、また、児童生徒の自己効力感がどのように学習の好条件を作るかに関する分析など、単なる計算機利用技術だけにとどまらず、学習者の心理にも寄り添い、かつ実用的な研究を行っていることがうかがわれた。日本より少し先を

行っているように感じられ、学ぶべき点も多いように思う。E-learningの応用範囲も広く、日本語学習を進めるウェブ教材や、動画教材による先住民族に対する偏見を克服する課題も取り上げられていた。

嘉義大学の修士課程院生の発表内容、英語力ともに安定しており、嘉義大学教員の、学生の自主性を重んじつつも行き届いた指導を感じさせられた。もちろん、本学からの修士課程大学院生も印象的な自己紹介を交えるなど堂々とした発表で健闘した。英語力を鍛えるよい機会となったことと思う。本学教員側の発表は、訪問者側であるためテーマの周縁にわたっており、専門性のギャップは当然あったわけだが、発表者の工夫によって十分克服できそうである。このくらいの幅広い分科会設定で適切だと思う。自分自身は気候変動の話題を取り上げたのだが、もう少し事前に準備して、かみ砕く工夫をすればよかったと後悔している。

実は本学教員の研究発表もそれぞれ新鮮に感じられた。本学では、教員同士が専門性の高い研究を互いに交流する機会が少なすぎるのかもしれない。

小学校も見学させていただいた（嘉義市港坪国民小学校）。私は算数の授業を見学させていただいたが、映像教材を効果的に活用していることはやはり印象的であった。当日はお土産にうちわを配ってくださったが、そのうちわにも、数学のE-learning教材のQRコードが印刷されていた。こうして、分科会でも小学校訪問でも、情報技術という得意分野を国レベルで教育に活かしていることが感じられた。

一方で、蝶の飼育をしている温室や、山羊を飼っている小屋もあり、自然や生活に関する教育にも工夫があるようだ。山羊の小屋の前では、生徒が飼育の様子を説明してくれた。見学の最後に、生徒たちの楽器の演奏があった。聞くと、国家への帰属意識の育成とも関係がある伝統的楽器を使っているとのことである。帰るころになってようやく民国108年となっている理由にも気づいた。清国の時代にも届く民族の複雑な歴史を背負った年号なのだ。

振り返ってみて改めて、学ぶこと、触発されることの多い交流であったと感じる。

## 2) 公立小学校の算数科授業を参観して（松島充）

小学校6年の円の面積を求める学習だった。授業では教科書巻末の補助教材である円を扇形に分割したシールを用いて学習が進められていた。この扇形分割シールは、8分割、16分割があり、円を等積変形して、平行四辺形に近似させてノートに貼っていく操作活動が行われていた。日本の算数教科書の巻末にも同様の円分割があるが、厚紙シートが限界である。この厚紙とシールの差は、教科書制度の差に起因すると考えられる。

台湾では、中央政府が教育課程を定め、小・中学校に九年一貫教育制度を導入している。小・中学校の場合は「国民中小学九年一貫課程綱要」に基づいており、小学校の1単位時間は40分、中学校は45分、高等学校は50分である。教科書には検定制度があり、検定に合格した教科書が学校現場で用いられている。小学校算数では、全6社が教科書を作成しており、1社は公的な教科書会社である。また、小中高すべてがカラー製版であり保護者が自費で購入する。小学校用は、100元～150元あたりの価格が多いようである。教科書採択は、学校ごとであり、学校内の1つの教科でも教科書会社が異なることがよくあるようである。

教科書制度の差で日本と最も異なるのは、教科書が公的負担ではなく保護者負担という点であろう。日本の教科書の場合、公費負担という点からその上限価格が設定されているため、教科書の厚みや巻末の補助教材などの制限がある。それに対し、保護者負担の教科書の場合は、巻末の補助教材は

教科書会社がある程度自由に作成することができる。今回参観した授業のような扇形分割シールを用いた授業は日本でも見ることがあるが、そのすべてが意欲ある授業者の手作り教材であった。この点から考えると、台湾の教科書は算数授業の質を一定程度担保しているといえるだろう。

また参観授業では、最初から4人組で机を向かい合わせたまま授業を受けていた。しかし4人で向かい合っているものの、友達の扇形分割シールでの操作活動を見るのみで、特に対話は行われず、教師主導で学習が進んでいた。他者との相互作用を意図した学習活動は、日本の方が進んでいるように感じられた。授業後半では、黒板に埋め込まれたスクリーン上に円の扇形分割シールの操作活動が表示された。4分割、8分割、…、64分割と分割数が増えていき、円が長方形に近似していく様子に、子どもたちから驚きの声が漏れていた。ハードウェア整備の面で、黒板にスクリーンが埋め込まれているという形は、非常に利用しやすいと感じた。日本の教室に導入された大型スクリーンは、多くの場合その大型キャリアと一体型になっていることが多い。これは安全面、管理面から多くの配慮を必要とするため、教員にとって決して使いやすいICT環境とはなっていないことを再認識させられた。

最後に、今後の展望について述べる。参観授業には、ちょうど嘉義大学の数学教育研究者が自らの研究のために授業参観にきていた。筆者も嘉義大学の研究者と多少言葉を交わしたが、授業中ということもあり大した交流はできなかった。今後の展望として、台湾や日本の授業観察を通して、台湾と日本の研究者がディスカッションを行うという方向性も考えられるのではないだろうか。

## まとめ：今後の課題整理と展望（櫻井佳樹・宮崎英一・高木由美子・松井剛太）

以上をふまえた本稿のまとめとして、嘉義大学との大学間連携を基盤とする、学部による国際交流の今後の展望について述べる。はじめに国際交流委員長である櫻井から全体的な方向性について提起した後、既に具体的な計画として走り始めている内容を宮崎・高木から、加えて内容的な交流をリードしている領域である幼児教育分野の展望を松井が論じる。

### 1) 全体的な方向性（櫻井佳樹）

第7回嘉義大学・香川大学合同ワークショップで得られた成果を基に、今後さらに嘉義大学師範学院と香川大学教育学部の交流を継続・発展させることができるか否かが、両大学にとって、また教育学部にとっても試金石となるであろう。これまで交流の中心を担って来られた創造工学部の垂水教授の退職を機に、両大学の交流は転換期を迎えている。これまでの経験や実績を生かして、今後とも継続することが出来るかが問われているのである。そのためには、担当者に過度の負担が集中する従来の在り方を見直し、インターナショナル・オフィスを中心に香川大学の国際交流事業の中での確に位置付けたうえで、大学組織全体でフォローする組織づくりの構築が何よりも急務である。そのためには、香川大学が今後も密接に交流する重点大学の一つとして嘉義大学を位置づけなければならない。

過去3回にわたって進んできた、幼児教育の研究・学生交流を進展させることはもちろんのこと、今回幼児教育に加えて、新たに日本語教育を専攻する院生や小学校教育コース教育領域の学生も参加し、研究発表や学生交流を行ったという点は新たなスタートとなった。また数学教育や教育哲学を専門分野とする教員も参加し、研究交流を行ったことは重要な一歩となった。今後は両大学の教育学部・師範学院の間でさらに研究交流する分野はないか調査研究をしたり、幼児教育やICT教育、理科教育など交流しやすい分野の実績をさらに積み上げていったりするなどが重要だと考える。それら

は、幼小中学校段階の教育制度や教育内容、教育方法等の日台の比較研究に発展するための一助となるだろう。そして将来的に交流が順調に進めば、附属学校間の交流や、教育実習の交流といった実践的な交流に発展することも視野に入れることが可能だろう。その意味で、早速2020年2月3日-17日に黄教授をはじめ8名の院生・学生が来学すること、また3月16日-27日の予定で（渡航制限により延期）高木教授、宮崎教授引率の下、2名の学生が嘉義大学を訪問することは心強い動きである。こうした活動を実現し、実りあるものとするためにご尽力いただいている関係者の皆様に謝意を表したい。

## 2) 国立台湾嘉義大学学生受入プログラムならびに香川大学学生派遣プログラム

(宮崎英一・高木由美子)

本ワークショップにて、国立台湾嘉義大学国際交流担当者からの講演を拝聴し、参加学生への聞き取り調査、引率教員の有無、教職員による今年度中の受入れが可能かどうかなど、プログラム開始に必要な条件を検討し、課外指導支援を中軸とした地域連携異文化教育支援受入れプログラム（2月）ならびに地域に基盤を置きグローバルな観点から学校教育教員に必要な資質向上を目指した異文化交流短期派遣プログラム（3月）を実施することを計画した。

受入れプログラムは、すでに採択されている日本学生支援機構の援助が受けられるかどうかを確認し、2019年12月6日を締切日に学生募集を国立台湾嘉義大学師範学院黄國鴻教授に依頼した。また、嘉義大学担当教員を含む嘉義大学ワークショップ参加教員、国際交流委員会委員、活動協力教員からなる支援グループを立ち上げ、2020年2月3日から2月17日の日程で、引率教員1名、参加学生8名の受入れプログラムを実施した。すでに先行しているコロラド州立大学、チェンマイ大学との交流プログラムの実施活動を参考に、香川大学及び教育学部表敬訪問、歓迎会、引率教員による講演会、附属学園での視察、授業及び探究活動参加、研究大会参加などの学校教育理解促進活動、香川県を中心としたフィールドトリップや体験学習を香川大学学生の協働で地域インターンシップ活動を行うことによる地域連携異文化教育支援が行われた。

また、派遣プログラムとしては、2019年11月22日を締切日に、2020年3月16日から27日の予定で、①本学の正規課程の在籍学生で②留学先での学修及び生活に足る外国語能力を有し。③学業成績が優秀であり、(GPA2.5以上を目安とする)。④留学先の学則等に従って行動できる学生を募集し、結果として2名の学生を採択した。嘉義大学国際交流課支援のもと、歓送迎会、国立台湾嘉義大学キャンパスツアー、中国語クラスへの体験入学、地域文化理解のためのショートトリップおよび体験学習、学校訪問を実施する予定であったが、渡航制限のため延期されている。

受入事業は、留学生が、附属学校等での見学、体験実習を行うとともに、教育課程外教育活動の補助活動実施を通して「社会に開かれた」初等中等教育の充実を図り、地域関連活動団体、協力企業などと連携したフィールドワーク実習などの文化交流活動を行う。派遣事業は将来、香川およびその近隣県で、教員として活躍する学生教育に資することを念頭に置き、語学能力の向上のための講義、異なる教育背景理解、また、自らの地域・日本および日本文化の紹介を通じて、異文化のみならず自国文化である日本文化を様々な角度から理解し、探究する能力を育成するとともに、主体的に調査・実習・研修活動を行うことによって自主・自律、創造性を育成できることを期待している。ワークショップから始まった受入・派遣事業であり、長期留学や、優秀な人材確保に向けた今後の進展を期待している。



### 3) 幼児教育コースの交流の展望 (松井剛太)

幼児教育コースにおける研究交流・学生交流に関する展望として、下記の点が考えられる。

第1に、附属幼稚園間の連携も含めた共同研究の可能性を検討することである。これまでの交流の中で研究発表を実施してきた結果、相互にどのような関心を持ち、どのような研究に取り組んでいるかを緩やかに理解できている。これらの成果を基盤にしつつ、二国間連携のプロジェクトとして、各大学の附属幼稚園も関連付けた共同研究を模索することができると思われる。そのための課題として、予算の確保が必須であり、外部予算及び学内予算の申請を計画的に進めることを考えなければならないだろう。

第2に、フィールドワーク型の学習も含めた学生交流である。松本(2017)で述べたように、これまでの学生交流の中では、エクスカッションなどを通して親睦を図る交流は行ってきたものの、両国における実際の保育場面を共に見学するなど、幼児教育に関するフィールドワークをもとにした交流は行ってきていない。お互いに保育の実態を視察したうえで議論を行うことによって、両国の幼児教育に関する理解の深まりが期待できると思われる。そのためには、全学における交流にとどまらず幼児教育独自の交流計画を立てる必要がある。しかしながら、インターナショナルオフィスをはじめとして、全学における協力なしに実現することは難しく、その点については検討が必要であると思われる。

#### 引用・参考文献

教科書研究センター. 2012. 『初等中等学校の算数・数学教科書に関する国際比較調査 調査結果最終報告書』.

松本博雄・寺尾徹・高木由美子・宮崎英一・ポール＝バテン・池田恭哉・松嶋佳加・高橋沙彩・山地一輝・森山真衣・野田恵子・小川綾花・瀧寧々・松井剛太. 2017. 「香川大学教育学部幼児教育コースにおける国立嘉義大学との研究交流・学生交流に関する報告」『香川大学インターナショナルオフィスジャーナル』 8: 27-38.

#### 謝辞

今回の訪問にあたり、台湾国立嘉義大学の黄國鴻教授をはじめとする教員や学生の皆様が準備・受け入れにご尽力いただいたことに深く感謝申し上げます。また訪問に関する全体的な準備に尽力いただいた、徳田雅明インターナショナルオフィス長、ロン・リム副オフィス長、山田千絵様はじめインターナショナルオフィス教職員の皆様、学内各学部より訪問に向けてのアレンジを担当いただいた先生方、教育学部学務係国際交流担当の丹羽鈴花様はじめ教育学部教職員の皆様には細やかに支援をいただきました。ここに記し感謝申し上げます。

また、今回の訪問学生は、香川大学インターナショナルオフィスより2019年度グローバル人材特定基金による資金援助を受けました。関係各位に心より御礼申し上げます。